

パーソナルジムの恰好いい
お兄さんに騙されて

セクハラ ストレッチ

からの
生ハメおまんこトレーニング
までされちゃった話



仲のいい友達に彼氏ができた。

おめでたいことだって素直に喜びたいけれど、正直言って複雑だ。元々好きなアニメ繋がりで仲良くなったし、彼氏いない歴年齢同士だねって笑い合ってたのに。

「はあゝ、裏切り者……」

メッセージで送られてきた彼氏との写真を見てため息が漏れる。

めっちゃくちゃ格好いいじゃん……いや、見せてって言ったのは私なんだけど……。イケメンだね、と返した。どうやらスポーツジムのトレーナーさんらしい。

「……私もせめて、この貧相な身体をなんとかしないとなあ……」

一緒に映っている友達の豊かな胸元を見えますため息が漏れる。

そういえば今日、パーソナルジムの会員募集チラシが届いていたような……。

グッズやブルーレイも買いたいけれど、写真を見ていると少しは自分磨きもしてみよう

かなあ…なんて気持ちになる。

（確か、マッサージとかエステコースもあるって書いてあったっけ……）

人の手でも借りたら少しはマシになるだろうか。

のろのろとベッドから立ち上がった私は、玄関に置きっぱなしだったチラシを手にとって、サイトのQRコードを読み取ってみることにした。

—— パーソナルジムの格好いいお兄さんに騙されてセクハラストレッチからの生ハメおまんこトレーニングまでされちゃった話——

「なるほどなるほど、それでご予約頂いたと……よし、わかりました！ 今日からみっちりトレーニングで自信つけて、お友達さんにも負けないような彼氏作っちゃいましょう！」
「は、はい……っ」

メリハリのある大きな声。私とはまるで住む世界の違うような、格好よくて背の高い、がっしりしたイケメンだ。

そのイケメンが、黒い革のソファに小さく座り視線をうろつかせる私の前に、膝をついている。

「俺、担当インストラクターの小野寺 啓介（おのでら けいすけ）です。うちは名前で呼ばせてもらうのが基本でして、さくらさんと呼ばせて頂くんて！俺のことも気軽に啓介とか啓ちゃんとか呼んじやってください！」

笑顔が眩しい……灰になりそう……。

せめて笑顔で返したいと思ったが、引きつった顔と小さな声でハイヨロシクオネガイシマス……と言うことしかできなかった。

「ではトレーニングウェアに着替えて頂いて……普段運動あまりされないということなんで、まずは身体をほぐすストレッチからやっていきましょう。こちらで着替えたら声かけ

てください!」

「は、はい、わかりました……」

そう言って小野寺さんは貸出のトレーニングウェアが置いてある場所と、更衣室を案内してくれた。

たくさん種類があるのでよくわからなくて、これかな……?　と思うものを手に取って更衣室に入った。

(……うへえ、これ、なんか露出多くないか……?)

おへそが見えるくらい短いブラトップと、シンプルなひざ丈の黒のスパッツ。ウィンドブレーカーみたいな上着はあるけれど、それがなければほとんど身体の線が丸見えだ。

こんな貧相な身体ではとても似合わないと思うけれど……これしかないのだから仕方がない。

下着を脱いで着替え、少し大きめのウィンドブレーカーのチャックを完全に閉めると、おずおずと更衣室から出て声をかけた。

「あの、着替えました、けど……」

「おっ、了解です！ それじゃあ、あちらの部屋で身体を伸ばしていきましょう」

ヨガマツトのようなものが引いてある部屋に誘導される。

パーソナルトレーニング用の個室だとは思うけれど、こんなに広いものなのだろうか。一番安いコースの体験をお願いしたはずなんだけれど……オープンしたてだから、サービスかな？ などと思っていたら、不意に背中と膝裏に手を入れられて、視界が反転した。

「っは……え……っ??」

「ふははっ、すみませんビックリさせちゃいましたね。さくらさんには寝た体制になっていただきたくて、俺が力をかけていくので」

「すご……全然何が起こってるかわかんなかったです……」

「最初は緊張しちゃうと思うんですけど、一対一でやらせていただくので、こうやって触れることにも慣れていただきたくて。じゃあ、力かけていくので、ゆっくり呼吸してくださいね！」

「いだだだだ!!! それ無理! 折れ、折れるう!!!」

「あはははっ、めちゃくちゃ硬いですねさくらさん! 折れないっすよ!」

十分後、そこには身体をねじられて叫ぶ私と、それを見て至極楽しそうに笑う小野寺さんの姿があった。

普段の運動不足が祟ってどこもかしこも硬い。ちょっと押されたりねじられただけなのに、すごく伸びてる感覚があって汗までかいてきてしまった。

「あつ、あづい……ストレッチ、まだやるんですかぁ……?」

「全然まだこれからっすね! 汗かいちゃいました? 上着脱ぎます?」

「うええ……私の身体、貧相で恥ずかしいんですよお……」

「だーいじょうぶですよ、結局トレーニングの時は脱ぐことになりますし……それにさくらさん、スタイルいいじゃないですか」

お世辞がお上手で…と内心思いつつも、小野寺さんのあっけらかんとした感じにも慣れてきた。この調子じゃ遅かれ早かれ脱ぐことにもなるだろうし…と、あまり逡巡せずチャックをおろし、ぱさりと上着を脱ぐ。

はあ、涼しい…。

「……………」

「っ…………あ、あんまり見ないでほしいんですけど……………」

「あっ…………ああ、すみません！　いえ、本当に…………スタイルいいなあ、と思って」

なぜか驚いたようにこちらを見る視線に居たたまれずに体育座りすると、慌てた小野寺さんがフォローに入る。そのまま緩やかに寝かされて、膝裏に手を当てられた。

ぐっと上に持ち上げられる。

（…………ん？　ちょっと際どくないか、これ…？　いや、でも普通にこういう股関節のストレッチ、あるか…）

痛みはないけれど、片足だけと言えど足を開かされてる体制に徐々に恥ずかしくなってくる。

ていうか私、今スパッツだけしか履いてないじゃん…。

「あつの、ちょっと…これは、恥ずかしいんですけど…いっただだー!!」

「あははっ、だーいじょうぶですって。股関節も柔らかくしないと、ケガするんで。ね?」

ニコ、と快活な笑顔を向けられて、大きな身体で覆い被さるようにして力をかけられる。恥ずかしい…の前に痛いってえ…!

「いだった、あのっ小野寺さ…が、頑張るんでえ、もうちょっと優しく…!」

「啓介です、俺」

「へあっ?」

「啓介って呼んでくれたら優しくしますよ」

何？　どういふこと……？

訳が分からない。分からないけれど、とにかく優しくして貰えるならなんでもいい。

「け、啓介さん……っ……！」

「はは、優しく、ね？」

「お願いします……っ、えっ……？」

やっと力を緩めて貰えた——と一息ついたのに、その瞬間両足を掴まれて開かせられる。がばりと開いた足の付け根の奥、形がぴたりと浮いて見えるそこに、啓介さんの腰が入り込む。

「ちよっ、と待っ……これ、恥ずかしいんで……っ！」

「え？　でも両足やらないと。皆やってるんで、恥ずかしがることないですよ。痛くないですよね？」

ぐ、ぐっと少しずつ力をかけられる度、ずり、ずり……♡　と、布一枚だけのお股に啓

介さんの腰が当たる。力をかける度にそこが擦れて、恥ずかしさも相まって息が上がる。皆、こんなことされて変な気分にならないの……!!?

恥ずかしさで頭がパニックになりながらも、耐えようと目をぎゅつと瞑る。

「はう……うう、っ………」

「……………」

すると饒舌な啓介さんが急に無言になった。

え、私、なんか変な態度とっちゃったかな……? そう思って恐る恐る目を開くと、すぐ目の前に啓介さんの精悍な顔が迫っていた。

顔の両側に手を置かれていて、覆い被さられて……もう、こんなのほとんど、エッチしてる時の体制みたいじゃん……!!

「……痛くない?」

「へあ……っ!? あっ、はい、痛くは……ない、です……っ」

「ん、それなら良かった。もし痛かったら言ってくださいね」

そういえば返事してなかったかも……。恥ずかしさに震える声でそう答えると、啓介さんは笑顔に戻った。すぐにまた動きが再開される。

ぐっ、ぐっ、と膝裏の手に力を込められて——痛くはない。ないけれど、ずりずりと……。おまんこに啓介さんの腰が擦れて、どんどん変な気分になっていってしまう。

「んう……。ううっ……。」

「さくらさん、息止めちゃダメですよ」

「うえ……。っ」

「ゆっくり呼吸して、ほら、吸ってー、吐いてー……」

「すー……。っ、はー……。っあ……。ん、ん……。っ」

力を抜けば抜くほど、ずり♡ ずり♡ と擦れる感覚が気になって、声が漏れそうになってしまうのに堪えることを許してもらえない。

バレないようにしなきゃと思えば思うほど身体の熱が上がる。

「んう……っは、ふ……っあの…啓介さんっ、ほ、他のストレッチとか……あ、ありませんかっ……!？」

「他の? ……そうですね、そろそろ違うところ伸ばしましょうか」

ようやく解放された……。起き上がりながらはふはふと息を整える。

次はキャットポーズという猫のようなポーズらしい。四つん這いになったところで少し安心する。これなら顔を見られなくてすむ……。

そう思ったのに。

「お尻は上げたまま、背中ではできるだけ床につけて——こうです」

「ひい……っ!？」

今度は背中から覆い被さってくる。

啓介さんは容易に私を抱き込めるくらい身体が大きい。落ち着きかけた心臓がまた早鐘を打つ。

「もうちょっととお尻上げましょう。これ痛くないでしょ？」

「ひゃっ、……っあ、はい、痛くは……んんっ……！」

覆い被さられているせいでうまくお尻を上げられずにいると、大きな掌で下腹を抑えられて、ぐっと持ち上げられる。次はお尻と啓介さんの腰がぴたりとくっついてしまった。お腹を押される度になぜかぞくぞくと熱が溜まる。

「まっすぐ手を伸ばして、そう、上手です」

「は、はい……っこれで……できてますか……っ？」

「いい感じですよ。胸をもうちょっと床につけられるよう、頑張ってみましょうか」
「は、へ……っ!？」

するりと啓介さんの手がお腹を辿ってもっと上に這わされる。

——た、確かに私のは大きくないけど、もうそこは胸だってえ……！

「あっ……待、啓介さ……そ、こは、ちょっと……！」

「そこ？　ここですか？」

恥ずかしさを堪えて言ったのに、全然やめて貰えない。

むしろ確認するように、すりすり……♡　と脇腹から徐々に掌が上へと這い寄る。先っぽの近くを撫ぜられてぞくぞくと腰が戦慄いた。

「——ここを、床につけて欲しいんです」

まるで動物のマウンティングみたいに、大きな身体に閉じ込められて——こんなの絶対、おかしいのに。

そこは胸です、セクハラですって言わなくちゃいけないのに。

「……難しい？　じゃあ、ここだけでもいいですよ」

カリ……ッ♡

啓介さんの指が、わずかに反応している先端の突起を甘く引っ搔く。

「あ、ひ……っ！？♡」

「わかりますか？　ここなら、床につきやすいですよね？」

「け、すけさ……だ、めえ、そこ……っ♡」

「ダメじゃないでしょ？　さくらさんこそ、腰落としちゃダメですよ」

縮こまって逃げようとするのに、もう片手でお腹をぐっと押されて戻される。こんなにびったりくっついていたら腰がビクつくのもバレてしまうのに。

カリ……♡

カリカリカリ……♡

「あう、あっ♡　も、わかったあ、やりますからっ♡」

「つけそうです？　息吸ってー、吐いてー」

「すー……はー……っあぁっ！？♡　なん、でえ……っ」

「まだ床についてませんから。ここですよ、ほら、意識して」

くにくに♡

カリカリカリ♡

必死に屈むのに床までは届かずにまた触られる。

カリカリされて勃起してしまった乳首はスポブラ越しでも簡単に摘まめてしまうみたいで、摘まんだ乳首の先端を爪先で引っかかる。

(ダメ、これ、頭ばちばちして♡ 身体びくびくしちゃう♡ こんな……絶対バレてるし、絶対わざとなのにっ♡)

「ひ、ううっ♡ け、すけさ……っも、できな……んんっ、つけられ、ないい♡」

「何度か深呼吸吸って力を抜いていけばつく場合もあるんで、もう少し頑張りましょうか。ほら、吸ってー……吐いてー……」

「む、りい……んあっ♡ ああ♡ やめ……も、手、どけてくださ……っ♡」

「ちゃんとポーズ取れないとストレッチの意味ないですよ？ ほら、またお尻下がってる。

ダメですって」

乳首をすりすり♡　する手は止まらないまま、お腹を押さえられていた手もつと下へとずれて、おまんこをむにい……♡　と抑えられる。スパッツに食い込んでいたそこが余計に圧迫されて、ぷちゅ……っ♡　と恥ずかしい音がした。

やばい、濡れてるの、バレた……！

「あう♡　やつ、やあ、も……へんなどこ、ばっかり……触るの、やめてください……！」
「——……変なとこって？」

気付けば、啓介さんの大きく響いていた声が低く、私にだけ聞かせるみたいな声音になっている。頭の後ろから響いてくるその声だけで、腰がぞくぞくと震えてくる。

「ちょっと触っただけでコリコリになった、ここ？　それとも、ストレッチされてるだけで濡れちゃった、ここ？」

カリカリカリ♡

くちゅくちゅくちゅ♡

言葉と共に乳首の先っぽを爪先で引っ搔かれて、濡れたおまんこの入口を遊ぶみたいに掻き回される。その度にへこへこ♡ と腰が勝手に揺れてしまう。

「や、あぁっ♡ こんな、あっ、んん♡ す、すれっちじゃ、ないい♡」

「はは、今更？ 下着もつけずにこんな簡単に触られちゃって、媚び媚びの声出しながらスパッツぐちゃぐちゃに濡らして……誘ってるって思われてもおかしくないですよ？」

「ひっ♡ んん♡ ちが、だって……はじめてで、わかんなくて……っひゃ!？」

ろくにポーズも取れずに丸まっていた身体をひょいと抱き上げられて、胡坐をかけた啓介さんの膝に座らされる。

こんなひどいことをされているのに、興奮したように薄く笑う顔が見えて、きゅう、と降参するみたいに喉が鳴った。

「はじめてならちゃんと覚えて帰らないと。男の前で迂闊に身体晒したらどうなるか、しっ

かりトレーニングしましうね」

そんなの絶対おかしい。それなのに逃げることができない。がっしり掴まれてはいるけれど、本気で抵抗したらきつと逃げられる、そんな力加減。

それなのに。

火照る身体が、ちっとも動いてくれない。

私は促されるまま、啓介さんの太い首に腕を回してしまった。

ずりゅっ♡

ぬりゅ♡ぬりゅ♡ぬりゅっ♡

気持ち良さで頭がぼーっとする。

あれから私は胡坐をかいた啓介さんにしがみついて、何度も恋人みたいなキスをされて……今は、スパッツ越しの濡れたおまんこに啓介さんの大きなおちんぼを挟んで擦り合わされている。

「はは、すっかり力抜けちゃって……足開くの上手になりましたね、まんこでちんぼ抜くトレーニングそんなに入った？」

「は、んむ♡ うう…♡ ふあ、な、に……？」

「なに、キスに夢中で聞こえなかったんですか？ まんこでちんぼ抜くトレーニング、気に入ったかって」

「あう、わかん、な…っああ♡ こし、へこへこ、なっちやう…っ♡♡」

「かーわい……腰へこさせて、俺のちんぼ好き好きって言ってるみたい。はじめて、なのね……？」

そんなんじゃないって言いたいの、ゆさゆさと揺さぶられる度に気持ち良くて情けない声が止まらない。

「裏筋でクリ擦る度に甘い声出ますねー……ここ好き？」

「ひゃっ♡ ああ、あっ♡ け、すけさ……っそこ、だめえ♡♡」

カリカリカリ♡

ぬりゅぬりゅ♡ こりゅこりゅこりゅっ♡

おちんぼでも指でもクリトリスを擦られて耐え切れずに身体が仰け反る。

すると屈んだ啓介さんにぴん♡ と勃起した乳首をぱくりと食べられてしまった。ちゅ、ちゅ♡ と甘く吸われる。

「ひいっ!?!♡ は、ひ……っいっしょに、するの、だめえ、ああ、あゝっ♡♡」

「ちょっと吸っただけでその反応……このよわよわ乳首もクリも、しっかり鍛えないとダメじゃないですか」

ちゅ♡ れろれろ♡

こりゅこりゅこりゅこりゅっ♡♡

（あ、あ♡ ごき乳首とごこクリなのばれてる♡ きもちいいよ♡ こんなのがすぐいく♡
おちんぼ扱きに使われながらイっちゃう♡）

「けい、すけさん♡ ああ♡ も、私…っ、イっちゃ…♡♡
「なに、もうイきそう？」

にこ、と笑われて激しく揺さぶられ、媚びた腰が止まらなく——なるはずだったのに。
がっしりと腰を押さえられて、こちらの動きを完全に封じられてしまった。

「ダメですよ、さくらさん」

「へあ……っ？ や、なん、なんでえ……っ？♡」

「俺のちんぽ、もつとちゃんと味わってイってくれないと。これから奥までごちゅごちゅ突かれていくトレーニングも、するんですから——ね？」

「やあ、あっ♡ むりっ、私……は、はじめてだからあ♡ むりです、そんな……♡」

囁かれながら抱き込まれてずりゆずりゆ♡ と無遠慮な腰振りをされる。

されるがままになりながらもふるふると首を振ると、また深いキスをされて。

「ん……すっかり慣らすからだーいいじょうぶですって、絶対痛くしないんで。クリこちゅこちゅ扱いて乳首もぐずぐずに甘やかして……とろとろになったまんこに、ゆ〜っくりゆ〜っくり挿れてください……ね？」

「ん〜……♡ やあ、あ♡ だめ、ぜったい、だめ……♡」

「はは、腰びくびくさせてとろとろの顔してだめだめ♡ って？ ——期待しすぎでしょ」

そう言いながら啓介さんはスパッツをいとも簡単にびり……と破く。愛液でてらてらと光る恥ずかしいおまんこだけが露出してしまった。

「やっ、だめ……っあぁっ!?!♡ まっでえ、ゆび、とめ……♡♡♡♡♡」

カリカリカリ♡

こりゅこりゅこりゅこりゅ♡

ぴんと勃ったクリトリスを指で直接甘やかすように撫で擦られる。

(だめなのに♡ はじめてなのにこんなところでおちんぽ入れられちゃうの、絶対だめなの♡ 聞いて貰えなくて気持ちいいのいっぱいされて♡ イっちゃダメなのに指止めて貰えなくて♡♡ もう、頭ばかになっちゃう♡♡)

「あ、あっ♡ けい、すけさん、それ、すぐイっちゃ、ああ♡」

「ダメですって、ほら、まんこに力込めて？ 我慢、我慢……」

「ひ、うぅ♡ むり、触っぢゃ、あぁっ♡」

すりすり♡ しこしこ♡

くりゅくりゅくりゅくりゅ♡

我慢って言うのに全然手を休めてくれない♡

言われた通りおまんこに力を込めても入口がひくひくと震えて愛液が溢れ、それにすら

感じてしまつて逆効果になる。

身体が勝手にクリトリスをすりすりゆすりゆ♡ と擦りつけるみたいに揺れはじめて、やつと戻れないことを知った。

——ダメ、これ、むり……♡

「ダメえ、あつ、びっ♡♡ やだ、イっちゃ、ああっごめ、なさ、~~~~っ♡♡」

びくびくびく……っ!!♡

絶頂感を堪えきれずに甘い震えが体中を襲った。快感にふーっ♡ ふーっ♡ と浅ましい息が漏れる。

イっちゃ、った……♡

「……あーあ、イっちゃったんだ、さくらさん。ダメって言ったのに、ね？」

いく瞬間をずっと黙って見つめていた啓介さんが低く囁く。それと共にぐちゅ……っ♡

と音を立てて、啓介さんの指がイきたてのおまんこに入ってきてしまった。

「うう♡ だって、あっ♡ 啓介さんが……っも、ゆび、だめえ♡」

「俺のせい？ 違うでしょ、さくらさんのクリがちよっと触られただけですーぐイっちゃう雑魚クリだからですよ？ ほら、ちゃんとごめんなさいして？」

「ひ、うう……っ♡ ごめ、あっ♡ い、イっちゃって、ごめんなさ……っ♡ ごめん、なさいいっ♡♡」

「そうそう、上手。はは……まんこくちゅくちゅされながらごめんなさいするの気持ちいいんだ？ すげー締まる……」

ぬりゅぬりゅ♡ すりすり♡

こちゅこちゅこちゅこちゅっ♡

愛液でとろとろの内壁を啓介さんの指が何度も行き来する。
その度にきゅんきゅんとお腹が疼いて締め付けてしまう。

「さくらさんのまんこ、もうすっかりちんぽ受け入れる準備出来ちゃってますね」

「んうう……っ♡ だって、え……っあ♡ ああっ♡」

「だって、何？」

「んう、け、すけさんの、ゆび♡ きもち、よくて……っ♡」

だから仕方ないんだと言いたくて回した腕でしがみつくと、深いキスが返ってきた。されるがままに口を開くとすぐに舌が侵入してきて上顎を擦られる。

それだけでも気持ちいいのに、内壁を探る指は甘く、とちゅとちゅ♡ と降りてきた子宮口を優しくノックする。

こんな所で、無理やりなはずなのに……まるで恋人同士みたいな触れ方に身体も心もとろけていく一方だ。

「は……、あんま可愛いこと言わないでくれます？ 痛くないようにしてるんで……まあ、こんな力抜けてたらもう痛くはなさそうか」

「んえっ、なに……、あっ、あっ………？」

ちゅぷ……♡ と音を立てて指が抜かれ、すっかりぬかるんだ入口にびと♡ と啓介さんのおちんぽが宛てがわれる。腰をぐっと持ち上げられて入口とおちんぽの先っぽをすり♡ されて……♡

「あっ？♡ やあ、だめ、入れちゃ……っおちんぽ、入れちゃだめえ……♡」

「はは……さくらさん、ダメなら踏ん張らないと。ちゃんと抱きついて腰落とさないでいられたら、ちんぽ入っていいですよ」

そう言うのと徐々に腰を抱く手の力を弱められる。言われた通り必死に抱きついて足も啓介さんの腰に絡めるけれど、快感に力の抜けきった身体が言うことを聞くわけがなくて。

抵抗も空しく、ずぷぷぷ……っ♡ と、ゆっくりとおちんぽが入ってきてしまった。

（うう……っ啓介さんのおちんぽ、大きい……っ♡ くるしいよ♡ くるしい、のに……ぬるぬるのおまんこにずりゆずりゆ擦れてくの、きもちよくて♡♡ 力、抜けちゃう……♡♡）

「あ♡ あう、う……啓介、さ……♡ ダメ、ダメえ……♡」

「はは……っ、さくらさん——俺、何もしてないですよ？ さくらさんがゆる〜っくり腰落としてるから、勝手に入っちゃうだけ……ああ、どんどん力抜けちゃってるじゃん。もう、全部入っちゃいますよ……？」

ずぶ♡ ずぶ♡

とちゅ♡ ぶちゅう……っ♡♡

（あ……♡ おくまで、入っちゃ、ったあ……♡♡）

「あーあ、入っちゃった……キツキツで締め付けすごいな……さくらさん、痛くない？」

「うう……っ♡ いたく、ないです……けど……啓介さん、の……おっきくて、くるひ……っ♡」

「……煽ってんの？ それ」

少し怒ったような口調にぴくりと肩を震わせるとまたキスが降ってきた。

ちゅ♡ ぢゅる……♡ と舌を吸われて唇同士を甘く擦られて。そうしているうちに、だんだんとおちんぼが馴染んで苦しさもなくなってくる。

(キス好きなのばれてる♡ 甘やかすみたいに唇すりすりされるの気持ち良いよ♡ お腹の中だんだん力抜けて…あ……？ 今、やっとお尻……啓介さんの膝に、くっついて……♡♡)

とうとう啓介さんの大きなおちんぼを全部飲み込んでしまったのを自覚したと同時に、興奮した声で耳元へ——動くよ、と囁かれる。

とちゅっ♡ とちゅっ♡ とちゅっ♡
ぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅ♡

「あぁあっ♡ は、ひっ♡ ダメえ、激し、あぁあっ♡」
「かーわい……まだ全然激しくくないですよ、さくらさん……っ」

腰を掴まれたまま何度も上から突き上げられてわけがわからなくなる。激しくないと言われても、ごりゅごりゅ♡ とナカをこそぐ刺激が強すぎて耐えられない。

「うう、あつ、だめ、なのにい……♡ あ！ やっ奥、おくとんするの、やめ、え……♡♡♡」

「奥突く度に入口きゅうきゅう締め付けてんの？ ……ほんとにやめてほしかったら自分で腰上げて抜いてもいいですよ、ほら、俺の肩に手回して」

「んっ、うう……♡♡ ……っちから、はいらな……♡♡」

啓介さんの綺麗な筋肉のついた肩にぎゅうっと抱きつく。必死に足をついて腰を上げようとすれば、情けないほど遅いスピードでずりゅ、ずりゅ……♡ と擦れるだけで全然先っぽまで抜けていかない。

「やあ……でき、できないい……♡」

「はは……ほーら、頑張って。お尻支えてあげますから」

むにゆりとお尻を掴まれる。それだけのことに身体が震えてしまう。一生懸命腰を上げて、ようやく先っぽまで抜けた——と、思ったのに。

ずちゅっ！♡

ばちゅばちゅばちゅばちゅっ♡♡

「ひぁあっ！？♡ あっ、ああ♡ やだあ、なんで、あっ♡ うそ、うそづきい！♡」

「嘘ついてないですよ、腰動かさないとなんて言っていないでしょ？ あんまり抜くの遅いから、ほんとはまだ入れて欲しいのかなあーって……ほら、さくらさんのおまんこ嬉しい嬉しいって言ってるよ？」

とちゅとちゅとちゅとちゅっ♡

お尻を掴まれたまま腰を突き上げられて愛液がおまんこの端からとぶとぶと溢れていく。

（だめ♡ もう全部ばれちゃってる♡ おちんぼ入れられて気持ち良くなってるのばれちゃってるよお♡ ぎりぎりまで引き抜いてからおちんぼで奥までこじ開けられるの、気持ち良

すぎて、むり……♡♡)

「あぁっまた♡ またイクっ♡ け、すけさぁん、おくやめ、やめてえ、イっちゃうからあっ♡♡」

「もうイクの？ ほんとよわわ雑魚まんこでかい……いいですよ、俺のちんぽしっかり味わいながらイってよ、さくらさん。ほら、イけ、イけ、イけ……っ♡」

「あぁっ♡ あ♡ だめえ、イク、またイクうっあ、あぁっ、~~~~っ♡♡♡」

びくびくびくっ♡♡♡

何度もお腹に力がこもって腰がビクつく。強すぎる快感に頭が真っ白になって、はへ、はへ、と浅い呼吸を繰り返す。

(あ……やば、なんか……あたま、ふらふら、して……)

どうやら許容範囲を超えた快楽を受け止めきれなかったらしい。
私の意識は、そこで途切れてしまった。

side. 啓介

「……………寝てるだけ、か」

気絶したさくらさんの身体をチェックして一息つく。すうすうと安らかな寝息が聞こえるので問題はないだろう。

——このまま行為を続けて起こしても良かったが、あまり熱中すると個室の使用時間が過ぎてしまいそうだ。

まだ猛ったままのモノをゆっくりと引き抜く。くったりと力の抜けきった身体をバスタオルで包み、カウンセリング室のソファに寝かせた。

無垢な顔で眠るさくらさんの頬を親指の腹でそっと撫でる。

「可哀想になあ……こんな悪い奴に捕まっちゃって」

仕掛けたのはちょっとした悪戯心からだった。恐らく貸し出しのウェアの、服の上下を取らずに上着と下着だけ取ってしまったのだろう。

明らかに露出が多いのに大して疑問に思っていない様子があまりに初心で、少し悪戯を試みたら可愛い反応をするから止まらなくなつて、結局——初めてまで奪つて。

——それでも、まだ逃がしてやれる気がしない。

自らの歪んだ性分に細いため息をつきながら、さくらさんの着替えと荷物をまとめて自分のバッグに入れる。幸いにもさくらさんが最後の予約だったので、早く上がることにした。

何も知らず眠る細い体を抱き上げてジムを出す。

どうやったらモノにできるだろうかと、それだけを考えながら。